

「若者の寺離れというが、実態は社会と関わりを持たずに引きこもる寺側の若者離れ」と仏教界の識者たちが指摘して久しい。そんな中で京都市にある古刹、浄土宗龍岸寺の池口龍法住職(41)はユニークな取り組みで若者の支持を集めている。

京都市・龍岸寺

「プ」フリースタイルな僧侶たち」を発足、街で配布する無料のマガジンを発行すると、じわじわと反響が広がる。

住職になってからは拠点を自坊にし、力を入れたのが「お十夜」の復活を目指した「念仏×アートフェスティバル」。寺で仏像彫刻

教室を開く仏師と協力し、阿弥陀如来など小さな仏像をドローンに載せて須弥壇の前を詠経に合わせて浮遊させる「パフォーマンス」は大きな話題を呼んだ。

「ドローンとは」と批判めいた論評が、見てもいない人たちからあったが、池口住職は「新しいことには常に反発があるので気に

しません。寺に人々の目が向いたのは成果。誰も興味のないことは視界に入らない。まず信仰の場が皆さんの視界に入ることが大事」と、自分流の教化の手始めであることを強調する。確かに、中世の寺で当時最先

端技術だった彫刻や絵画で来迎図を制作して人々に訴え掛けたのと根本的な相違はない。

意表を突く手法だけをとらえての非難には「仏教はあらゆる層、世代に関わっているべきで表現も多様であっていい」と。一方では寺での葬儀を普及させ、イベントの際も必ず法要を営む。「NO」先祖 NO

LIFE「玉鬘盆会」と山門掲示板標語にも工夫を凝らし、これまで寺に縁

のなかった若者や市民を導き入れている。ドローン仏を見た20代男性が「お寺で極楽浄土を見てきた」とツイートしているのに「これが気付きの契機。ここから仏教の奥深さに触れてほしい」と感じた。

日常に祈りを

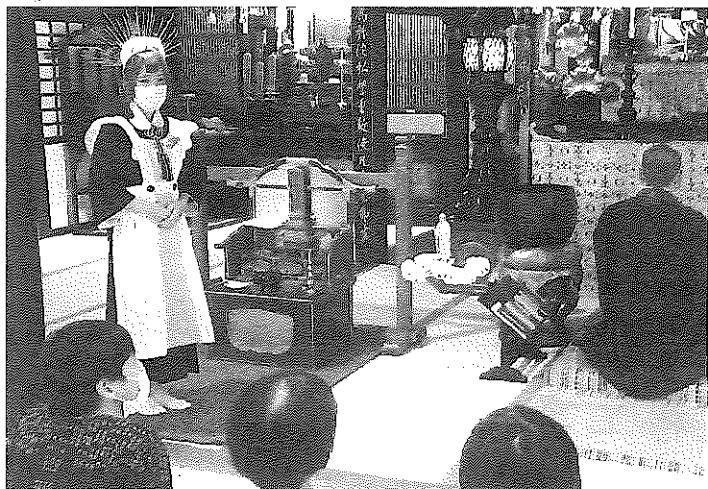
コロナ禍でSNSによる交流がますます拡大し、住職も以前から「YouTube」などインターネットをフルに活用している。だが「表面的なつながりばかりが増えている。情報社会でネガティブな情報から離れられず誰もがイライラしている」とも。そして自分自身は毎朝の本堂での勤行が「コロナもネット炎上も入ってこない、本来の自分になれる至福の時間」という。そのように、何か大きなものに支えられて苦から抜け出すような祈りの機会を人々の日常に持つてもらうことが願いだ。

家庭でその祈りの場をつくるために仏具仏壇の普及を目指して開いた仏像彫刻教室の日。感染防止に人数を絞ったとはいえ、子供や若い母親も含め老若男女十数人が地蔵像作りに取り組んだ。時折「この線が大

きっかけは、絵本山知恩院で教化に携わる中で「檀家制度だけでは若い世代の仏教ではない。本来、宗教は教団内だけではなく世代を超えて個人に訴え掛けるもの」と、従来のやり方に違和感を抱いたこと。仲間間の僧侶たちと呼び掛けて09年に超宗派の若手グルー

仏像ドローン

寺イベントで若者呼ぶ



本堂では「メイド」の立ち合いでドローンによる仏の来迎が再現された

事」などと手を添える講師の指導で、粗彫りした木曾ヒノキに彫刻刀を入れていく。本堂にゆったりした時間が流れる。